

# 研究通信

No. 122 1月刊  
1981年研究会局  
村落社会事務  
明治大学農学部  
農村社会学研究室  
川崎市多摩区生田 5158  
(044) 911-8181

## 八一年度第一回研究会開催案内

今年度の共通課題「農村計画——農村自治の課題の展開として——」に向けて、第一回研究会を次のように開催いたします。

一、報告者 高橋明善会員・高橋正郎会員

一、内容 農村計画についての論点提起

一、日時 一月三一日（土曜日）午後一時半より

一、場所 中央大学会館（国電お茶の水駅下車）

## 特別研究会開催案内

一九八〇年の世界農林業センサスの結果がまとまってきたので、農水省の方を招いてセンサスについてお話を聞く会を開きたいと思います。

## 「農村自治」総括大会に参加して

大川 健嗣

一、報告者 農林統計情報部足利課長補佐  
一、内容 八〇年センサス集落調査を中心として  
——集落調査の特徴点について——  
一、日時 二月一四日(土) 午後二時より  
一、場所 中央大学会館（国電お茶の水駅下車）

村研第二八回大会は、奈良県下多武峰にある多武峰観光ホテルで開催された。十月三、四の二日間で一〇〇人を越す会員が参加し、三年

がかりの共通テーマ「農村自治——構造と論理」の総括大会となつた。古川彰、谷口浩司、柄澤行雄の三会員による自由報告があり、次いで関順也「近世村落の推移」、長谷川昭彦「相互扶助慣行と農村自治」、春日文雄「農業危機進展と『むら』構造」、佐藤正「農村自治——構造と論理」の四会員による課題報告を受けて、二日目に討論がなされた。以下、討論の主要な争点または論点のみに限定して若干の感想を述べてみたい。

### 〔一〕

討論は、余田・細谷・東三会員の司会進行により進められた。今大会は、司会者団により「歴史篇」と「問題篇」の二つの柱がたてられ、討論がなされた。

「歴史篇」では、(1)「藩制村に自治はあったか」、(2)「市制町村制施行前の『地方自治』と『農村自治』」の二点に絞って論議された。まず、岩本会員から報告の「西の村」「東の村」の型論(仮説)に対する批判から討論が開始され、むしろ型論ではなく「段階差」として捉えるべきではないかといつた岩本発言などがあり、それに端を発し、「むら」または「村落」の枠をどう考えるかに議論が発展し、閲会員は、「寄り合い」関係こそが近世「村落」の実体と捉えたいとの考えが示された。それとの関わりで村研の古くて新しい永遠のテーマとも言うべき「共同体」論にも及んだが、この問題に関しては入口でヒターンをしてしまった。

次に閲報告において、明治初期の大区小區制に言及され、「大区」

が以後の行政村になつていると考えるという報告があつたのに対し、まず菅野正・菅野俊作両会員から、それは事実誤認ではないかとの厳しい指摘がなされ、大区小區制は、本質的には、むしろ明治権力強化策の一環として利用されたもので、この当時の農村自治は国家権力により包摶されてしまっていたのではないか、むしろ「農村自治」らしいものが確認できるとすれば小作争議期になつてからのことなのではないか(菅野正会員)、との積極的見解が示された。

ここで高山会員から、この問題に言及する場合、すなわち農民の性格を検討する場合、歴史的・段階的認識を欠いてしまっては議論そのものが不毛な議論になりはしないか、との指摘がなされ、それをある程度受けた形で余田会員から見解が示されたが、基本的には閲会員と同趣旨のものであったようだ。高山会員は、なお議論の展開を不満とみて、農民および村と明治国家権力との対抗関係の中で「自治」が語られなければならない。しかもこの「むらの性格」なるものは歴史的に変化するものとして捉えられるべきだ、との指摘がなされた。

### 〔二〕

次に問題篇に移り、ここでは、(1)「地方自治」と「農村自治」——行政と運動——、(2)自治の主体——農民層分解とも関連して——、(3)展望——いま農村・農業・農民に何を展望し、「農村自治」を論ずるか——の三点に絞られた。まず司会の東会員から「研究通信」

料にもとづき紹介された。

まず、長谷川・春日両会員の見解が共通課題に具体的にどう関わる主張なのか、前日の報告では必ずしも鮮明でなかっただけに、この点の確認（大川）から議論は開始された。この点佐藤正会員の報告は論旨はかなり明快だったようだと思う。岩手県志和農協の具体的な実践事例を通して、旧村単位を基盤にした志和農協が、有畜複合經營により農家経営を確立しつつ、他方農民会館を農民の「砦」化することにより、国独資本制下における今日的「農村自治」の堡壁を確保し続けているという報告がなされた。討論はこの三会員の報告を中心展開されたが、部分的にはかなり重要な論点への言及もあったが、全体的にはもうひとつ突っ込みが足りなかった感じがある。その原因を考えみると、いずれにしても個別具体的な事例を踏まえた共通課題への議論の一般化ないしは普遍化が、報告者によつて必ずしも明確に提起されずに終ってしまったところにある、と言わざるを得ない。たとえば、佐藤報告が、今後の日本農業・農村の方向性を探る時にどこまで一般性を持ち得るのか。その際、春日報告の対象地たる稻作単作地帯庄内の場合は、志和農協路線を採り得るのか、あるいはこれとは別途な路線を探らざるを得ないのかといった問題などである。もちろん、総括討論に参加した会員全体の責任でもあったわけであるが。

しかし、一方では、今大会において、農村自治の「主体」との関わりで、戦後における「小農」の性格規定、とりわけ「土地持ち労働者」とは何か。また、佐藤正会員から提起されたところの日本農

業の「アシア的零細性」にもとづく農民的土地所有（論）をめぐる論議など、今後の大会で検討されるべき重要ないくつかの課題が提起された大会でもあって、それなりに有意義な大会であったと思われる。

最後になりましたが、今大会開催にあたってなにかとぞ尽力願つた奈良女子大学のみなさん、大会事務局の高山会員に対し謝意を表したい。また、今大会司会者団のアイデアで総括討論のために配布された「通信」からの引用資料は大いに有効であったことを特記し、これについても感謝したい。

（一九八〇・一〇・一〇）

## 第二回大会に参加して

岡田祐成

大会は第一回目の午前中自由報告として、古川彰「過疎山村の変容と住民の対応」、谷口浩司「鳥取県における酪農經營の展開と危機のなかでの諸組織の対応」、柄澤行雄「生産組織の存立条件」の報告が行われ、午後に入ってまず、関順也「近世村落の推移」が報告され、つづいて長谷川昭彦「相互扶助慣行と農村自治」、春日文雄「農業危機進展と『むら』構造」と課題報告が行われたが、どちらも現地調査をふまえた熱っぽい報告であったため、時間オーバーぎみで、岩手県紫波町志和地区の現状分析を通じた「農村自治構造論理」という佐藤正報告は持ち越され、翌日の討論はその後に行

われた。

討論は司会から、「農村とは何か」「自治とは何か」という観点から、村落自治から農村自治への基点はあるのか、その内実は実証されうるのか、という問い合わせが提起され議論が進められた。まず岩本会員から、関・神立報告に対し、関東・関西村落の歴史的比較の意味合いが鮮明でなく、古島氏の寄生地主制支配に対するとらえ方が誤りではないか等々が問われ、菅野(正)会員からも、明治二二年ににおける町村合併の事実関係がおかしいのではないかとの指摘があり、自治の歴史的展開における問題として進められた。これを受けた関会員は、東西間の関係は本質的なものではなく、歴史的差異と考えるべきものと思うしながらも、共同体は「支配への対抗」といった側面よりも、「つきあい」の側面が重視されることを強調した。

しかし、菅野(正)会員からの指摘に関しては両者の事実認識がかみ合わず、後に問題を残した。ここでまた菅野(正)会員から、地主制期における農民自らの抵抗組織、それを自治というのかという課題がよせられ、同会員自身はこれを、農民が閉ざされたへ殻の中で活動している限りそれは操作され、自治とはいえないのではないかとされた。加えて、司会の高山会員は、農村自治をとらえる観点として、自治の担い手である農民の家と村の変貌に規定される性格の問題と、資本と小生産者における行政的問題とがあげられたとされた。また報告者の佐藤(正)会員からは、運動としてとらえてゆくべきとの余田会員からの批判はあったものの、抵抗としての自由民権運動と農村自治の関連が未だ究明されていないことが指摘された。結局高山会員が、農民の対抗は資本蓄積と寄生地主制の歴史的動向の中で、幕藩、明治、戦前と洞察されるべきことを提言されたが、これ自体と農村自治の関係如何の結論を出すまでには至らなかった。

次に、春日報告に対し大川会員から、農業危機の認識が不明確であったこと、長谷川(昭)報告における相互扶助慣行と農村自治の関連が鮮明でなく、慣行はむしろ封建的なもので、これと自治はつながるのかとの質問が提出された。

これを受けてまず春日会員は、農業危機を小農の労働力の分離と規定され、村の構成が、農家・「土地持ち労働者」・非農に分れる中でどういう展望を持ちうるか、この根底には労農同盟がないと自治は発達しないと論じられた。

また、長谷川(昭)会員は、相互扶助慣行の母体は村であり、これは自衛をする組織ではないか、そこでこの慣行は自衛の為の行為様式が固定化したものであり、そこには直接民主主義が成立していたと推定できる。そうなると村の自治が非民主的だとはいえないのではないかと反論された。この点に関して、佐藤(正)会員から、基本的人権を認める自治とそうでないものを区別することが提起され、資本主義は共同体を解体させるが、潜在的なものまでは解体しつくせないとする長谷川(昭)会員へ同意しながらも、どうこれを顕在化させるかが問題であるとされた。また、同会員は、先の春日会員における「土地持ち労働者」について、この内実はきわめて複雑で検討の余地があり、これを「土地持ち労働者」として一括することに批判的な発言がなされた。ここで討論は、相互扶助組織は民主主義を農村

に定着させるものかという点が、どう自治の担い手として位置づけるのかという問題と関連して進められた。大川会員は、先の長谷川(昭)発言に再度反論し、生活と生産を一体化しないと自治は定着しないのではないか、そうだとすると長谷川(昭)会員の調査は生活に重点がおかれすぎて片手落ちではないかと指摘された。これを受けた長谷川(昭)会員は、大川会員の発言を認めた上で、調査では生産のそれ、すなわち生産の基本的手段の共同がみられず、村落共同体的なものを摘出できず困惑した主旨を報告され、内からみれば民主的だが、外からみれば大川会員の指摘通り国独資の利用手段に化していないことはないと論じられた。

ここで細谷会員は、農民が自治と思いつつも、ファシズムに利用されてきた戦前の状況からも考察されるべきことを示唆された。この展開下で岩本会員から、相互扶助慣行は都市の下町にもあり、なぜ農村だけが、農村の民主主義だけが問題とされなければならないのかとの疑問が出された。これに対して長谷川(昭)会員は、都市と農村の居住に対する考え方がちがうけれども、べつに農村に限った問題ではないことを改めて強調された。

ここで議論は佐藤(正)報告に移り、菅野(正)会員から、農協の活動を通して農民層の分解は阻止されるのかとの質問が提出された。これを受けて佐藤(正)会員は、これを否定した上で、民主主義を守ってゆくことは階層間の差別なく考えてゆかなければならず、これは一つの地域の農業を守ってゆくことと同じことであると論じられ、へ日

本的なく共同の論理の適応が、農協での基本的人権を守ることにな

るのではないかと結言された。これに対し高山会員は、現実を考えると、一定の「民主化」を経た中での小農の性格規定が農村自治を考える上で不可欠な認識で、この点が脱落していることを批判され、さらに長谷川(昭)会員も、第二種兼業農家をどう考えるか、これは単に「土地持ち労働者」として一括されるべきものではなく、日本の農業・農村を左右する重大問題であると指摘された。これを受けて佐藤(正)会員は、生産力段階にどう適応するか、第二種兼業農家の一つの問題であるとし、農地改革による自作農は単なる自作農ではなく、国独資に対応したへ日本的な自作農で、この点を一つの課題とされることを提起された。

ここで司会から発言を求められた島崎会員は、土地の管理が農業労働者も含めて考えられるべきこと、すなわち、土地の自主管理が労働者・農民相互に問われるべきことを指摘され、自治は歴史的諸段階を経た都市、かつ農村の関連下に考察されるべきことが提言された。これに加えて高橋(昭)会員から、生産力の低い不毛の土地への考察が示唆され、地域は土地問題をどうしてゆくかが、農協の活動との関連下で問われてきている点が指摘された。

以上、本大会は島崎・高橋両会員の貴重な指摘をもって終焉した。この大まかな討論要旨はすべて私のメモによっている。

初めて村研に参加させていたくこともあって、私は大きな期待と不安に胸を躍らせ、今大会に臨ませていただき。予想通り会場はあふれんばかりの熱気で、終始未熟者の私は圧倒されどうしてあ

つたが、歴史の香漂う飛鳥の山々と史跡は三日づづきの好天にめぐまれて、緊張ぎみの私を十分癒してくれるものであった。万葉の里で、こうした実ある大会に出席できたことに、私は今よろこびを感じながら原稿用紙に向っている。これも主催・事務局の方々の御努力と御配慮の賜物であるう。最後になってしまったが、こうした関係者の方々に謝意を表し筆をおきたい。

## 第二八回大会 総会報告事項と決定事項

### 一、事務局報告

1. 運営委員会、宿題委員会、研究会の開催については、研究通

信一一八号より一二二号に掲載した通りである。

#### 2. 会員動向

会員総数 三四一名（一九八〇年十月三日現在）。過去一年間における変動は新入会員一八名、退会員五名、死亡四名、なお総数三四一名中住所不明会員七名。

### 二、会計報告

#### 1980年度会計報告（80年10月1日現在）

##### 収入の部

79年度			80年度		
前 年 度	繰 越 金	1 55,943	2 45,847		
会 費	収 入	5 61,250	7 14,045		
利 益	息	9 14	7,756		
合 計		7 18,107	9 67,648		

##### 支出の部

研究会費	264,000	633,150
通信簿費	0	34,650
名簿印刷費	142,840	164,370
郵便送信料	50,730	36,030
連絡会場費	4,500	4,550
文具消耗品	5,190	36,190
講師謝費	5,000	10,000
香典費	0	10,000
引継謝金	0	7,000
小計	472,260	965,940
次年度合計	245,847	1,708
	718,107	967,648

### 三、編集委員会報告

研究年報第十六集が刊行された。第十七集執筆希望者は編集委員まで申し込むこと。

### 四、一九八一年度事務局について

長谷川昭彦会員にお引受けいたしたことになった。新事務局の住所は左記の通り。

〒214 神奈川県川崎市多摩区生田五一五八

明治大学農学部農業経済学科

農村社会学研究室

電(044)911-1818(内線四五四)

### 七、その他

一九七九年八月にメキシコで開催された国際農村社会学会議に参加した坂井達朗会員より、会議の概要が報告された。

以上

### 五、第二九回大会開催について

関東地区にお引受けいたことになり、世話人柿崎京一会員により、一九八一年十月中旬日光で開催する予定であると報告された。

### 六、新運営委員の選出

運営委員の任期(二ヶ年)満了にともなう改選は五名連記により

十五名前後を選出し、この新委員は、地区・専門分野を勘案して若干名の委員を推薦する方法が了承された。以上の手続きにより選出された新運営委員はつぎのとおりである。

北海道地区 布施鉄治、酒井惠真

東北地区 安孫子誠、岩本由輝、菅野正、細谷昂  
関東地区 柿崎京一、黒崎八洲次郎、島崎稔、高橋明善、高山隆三、中野卓、蓮見音彦、長谷川昭彦、安原茂

関西地区 岩崎信彦、坂井達朗、鳥越皓之、中田実、松本道晴、余田博通

第一回運営委員会は、十月二十五日(土)、中央大学会館にて開か

れ、出席者は島崎稔・安原茂・高山隆三・蓮見音彦・柿崎京一・長谷川昭彦。

#### 一、編集委員の選出について

#### 二、村研年報第十七集編集について

#### 三、本年度の共通課題について

#### 四、宿題委員の選出について

#### 五、その他

第三回運営委員会及び第一回宿題委員会合同委員会が十二月六日、

明治大学大学院会館において開催された。出席者は、島崎稔・安原茂・高山隆三・蓮見音彦・吉沢四郎・木下謙治・高橋正郎・高橋明善・似田貞香門・長谷川昭彦（事務局）

#### 一、本年度の研究会開催計画について

#### 二、第一回研究会について

### 共通課題について

一九八一年の共通課題は次のとおり決定しました。

#### 「農村計画——農村自治の課題の展開として」

これに決まるまでの経過およびこのテーマに関する運営委員会および宿題委員会での討議の概要を次に記します。

まず、総会の席上、アンケートをあつめたところ、「農村自治」に関する問題を希望するものが非常に多かった。また農村生活に関するもの、農村支配に関するものがあつたが、「戦後自作農と自作農体制とは何であったか」また、「小農經營体制の問題と展望」というテーマもあった。さらに「農村計画」というテーマもあった。また、八二年が村研三十周年にあたるところから、「八〇年代の農業農村」「第一回村研の共通課題は何であったか、それがどのようにならかになつたか」という意見もあった。

このような意見を受けて、第一回運営委員会では、今までの農村自治というテーマを深める意味で、「農村自治の展望」が問題となつたが、農村自治は三年間連続したテーマなので今回は主テーマには用いないことが確認され、「戦後自作農体制の検討」「農村体制の変貌と農村計画」「農村計画——小農經營体制の変貌と今後の農村の展望——」などの案が出されたが次回に持ち越された。

第二回運営委員会で最終的に前述のように「農村計画——農村自治の課題の展開として——」というテーマに決定した。これは三〇周年へのつなぎの意味もあり、福祉論的なものをも入れ、人間にも焦点をあて、農政の問題をも反映し、さらに農村自治の問題をさらに先へと展開する意味を含め、歴史的にも取り扱うことができるといふような諸面をもつていると考えられた。

第三回運営委員会と宿題委員会では農村計画のもつ諸課題が検討された。それをとりまとめてみると次のとおりである。

#### 「農村計画」の類似概念に「農村建設」「農村開発」「村づくり」

「集落再編」「ふるさとづくり」などの言葉があるが、まずこれらの意味内容を明らかにする必要がある。つぎに「古い農村が崩壊しつつある、または崩壊した」ということは共通の認識としてあるであろう。

とすれば、その古い農村とは何であったのか、また古い時代の封建的な共同体はどうなったのであらうか、という点も問題となるうし、「自作農体制」「農家」「農民層分解」も問題となるう。

そして、来るべき新しい村や地域社会とは何が基礎となり、どのような形をとるであろうか。このために現在の地域農政や戦前の農政をもう一度見直す必要があらう。さらに集落や生活の主体的再編成の力はあつたのか、どのようにして作り出せるのか、そしてまた、農業の規模拡大路線と地域ぐるみの対応との問題を検討する必要もある。このようにして、現在の三全総の定住圈構想と農村とのかかわりも考えに入れるべきであろう。

## 新宿題委員の選出について

新しい宿題委員が左記のように選出されました。

北海道	布施鉄治	白樺 久
東 北	大川健嗣	不破和彦
関 東	島崎 稔	高橋明善
	東 島崎 稔	似田貞香門
	島崎 稔	吉沢四郎
	島崎 稔	高橋正郎
長谷川昭彦		
関 西	松本通晴	岩崎信彦
	木下謙治	中田 実
西 部		北原 淳
		長谷川宏一

## 編集委員会について

### 一、編集委員

安原 茂（事務担当） 安孫子麟

柿崎京一

小池基之

後藤和夫

島崎 稔

嶋田 隆

中野 卓

蓮見音彦

福武 直

余田博通

布施鉄治

以上

### 二、編集委員会報告

村研年報第十七集編集について、今回はとくに一本八〇枚を六〇枚にして、九本を掲載したいと思いますのでその旨よろしくお願いたします。

### 三、研究動向について

年報十七集の研究動向の執筆者が左記のように決まりました。会員諸氏におかれましては、一九八〇年一月から十二月までの一年間の著書・論文などの別刷ないしはリストを分野に応じて担当執筆者にお送り下さるようお願いします。また、御自身でお書きになったもの以外でも、特に手に入れにくい紀要などに掲載された研究などについても情報をお知らせ下さい。なお、民族学・社会人類学に關

しては、一九七八年一月から八〇年十二月までのものをお願いします。

## その他の

### ○史学・経済史学

佐藤常雄（筑波大学）

〒270 松戸市新松戸七一二二一D-1014

○四七三一四五一八二一七六

### ○経済学

高橋正郎（農技研）

〒277 柏市十余一七一-1011

○四七一一五四一六九三六

### ○社会学

多々良翼（宮城学院女子大学）

〒980 仙台市通町二一一〇-110

○二二二一-三一四一六九五七

### ○民族学・社会人類学

上野和男（明治大学）

〒189 東村山市秋津町四十三四一一〇

○四二二三一九三一五〇〇九

## 次期大会会場について

柿崎会員（宇都宮大学）より提案され、八一年十月十三日前後、中禅寺湖畔の地方公務員宿舎を考慮中との事です。

第三回運営委員会におきまして、村研三〇周年記念行事を考える会を組織することについて検討し、さしあたり、柿崎京一・蓮見音彦・高山隆三・安原茂の諸会員によつて具体化することとなつた。国際社会学会「ISA」への加入の件については、総会において決定する。

## 『村研年報』ご購入のお願い

昭和五五年十二月現在の販売状況からみて、約三分の一以上の会員が『村研年報、第一六集』を未購入のようです。未購入の会員はお早目にご購入され、併せて図書館、研究室などにもバックナンバーを揃えていただきたくお願い申し上げます。

なお『村研年報、第一六集』は定価四五〇〇円ですが、会員には送料込みで四〇〇〇円となりますので、村研会員であることを明示の上、〒102 東京都千代田区九段北一-八-二（電話〇三一二六五一五〇）（振替 東京 八一一四七七四）

御茶の水書房へお申し込み下さい。

## 〔会員動向〕

### 〔住所所属変更〕

大内雅利  
丹野朝栄  
小林文人  
小箕俊介  
佐藤常雄  
高橋正郎  
未 来 社

国分寺市富士本一一二七一三三  
江戸川区西小岩三一十四一一 濑柳マンション五〇一号 田 ○三一六七三一四五  
杉並区永福三一五〇一一一五〇一  
168 133 185

(西谷能雄氏と交替)

270 松戸市新松戸七一一二一〇一四 田 ○四七三一四五一八二七六  
277 柏市十余一七一一〇一 田 ○四七一一五四一六九三六

### 〔新入会員〕

久力文夫	京都大学農学部
満田久義	仏教大社会学部
荒穂豊	明大大学院
池上甲一	京大大学院
岡田祐成	京大大学院
黒柳晴夫	京大大学院
片倉和人	京大大学院
愛知学院大	京大大学院

440 606 214 603 611

宇治市木幡西中二三ニ宇治川一一六〇五 田 ○七七四一三三一一九八七  
京都市北区上賀茂高縄手町六五 田 ○七五一七一一四〇三七  
中野区鶯の宮三一四〇一四グリーンフラット一〇一一 田 ○三一三三九一一五一一  
京都市左京区北白川追分町京大農経教室  
川崎市多摩区宿河原五四五 浅山庄  
京都市左京区片倉木野町一二九 東光荘  
豊橋市平川本町三一一三一六 田 ○五三三一一六一一五〇四一

佐藤直由	東北大學	980	仙台市川内東北大學教育學部
長谷川昭一農業	農業	959-14	新潟県加茂郡大字中大谷六二八
渡辺安男香川大学	香川大学	761	香川県木田郡牟礼町大字牟礼三七〇一四 但〇八七八一四五一三三一九五
橋本恵次東北農試	東北農試		盛岡市下厨川赤平四東北農試宿舎RC一一三五
守屋孝彦茨城大學	茨城大學	310 020	水戸市東原三一三一四一茨城大學東原宿舎 RC一一五〇五

〔退会〕 松尾精文 北原糸子

〔死亡〕 古宮憲義

〔住所不明〕 戊野真夫

### あとがき

十月に事務局をお引き受けし、はや二ヶ月余が過ぎてしまいま  
した。前年までの課題と少しづかって本年度は「農村計画」という

概念の中に從来の研究の成果、手法が堆積されているばかりでなく、  
今までにない新たな方法論も考えられなければならないと思われ、  
その研究の意義の深さがひしひしと感じられるわけです。会員諸氏  
とともに大いに考え、論じていきたいと思います。

前事務局の高山会員をはじめ、運営委員、会員諸氏から種々御協  
力と御助力とを得ながら事務局を運営していくたいと思います。  
どうぞよろしくお願ひします。